
ある日のこと

砂糖さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日のこと

【Nコード】

N6016Y

【作者名】

砂糖さん

【あらすじ】

ある日 1人の男が小隊に参加した しかし小隊は彼を残し全滅敵地に残された彼が綴った日記 それは何を物語るのか。

キャラ紹介な日々（前書き）

まさかのキャラ紹介です 送れて申し訳ありません

キャラ紹介な日々

主人公

高原 一

年齢：21歳 趣味：日記

名を捨てた兵士 高原 一 は偽名である

実際の名は不明 中国帝国が日本侵攻をした際の爆撃により妻と2人の子を亡くし

行く当ても無く軍隊に志願した

しかし 遠征先の中国帝国本部付近で小隊は自分を残し全滅味方がいると思われる海岸沿いまで逃げることになったが

突然の来訪者により 事態は急変してしまった。

ヒロイン

ルーカス・マイ

年齢：不明 趣味：狙撃

高原を救った『ルーカス』と言う傭兵の娘 喋ることと見ることを失っており

音だけで狙撃を行う 当たらぬことはない 必ず命中する

中国帝国は彼女を恐れており 音無の悪魔として指名手配している

なお 彼女は高原と同じ 日本軍の生き残りでもある。

サブ主人公

アキ

年齢：不明

謎の青年 高原とマイを連れ帰った男 目的も何もかも 今は不明である

わかっていることは1つ 彼らを助けに来た と言うことだけ。

キャラ紹介な日々（後書き）

ちよくちよく更新するかも？

失われた日記（前書き）

この小説の内容はとも少ないですが 気にはしないでください

失われた日記

ある日 目が覚めた

天に広がる美しい夜空

ふと思うと今日で3日目

いつも銃を持ち 前へ進んでゆく兵隊

自分もその中に 気づけば居たのだ

だがしかし 現実とは違った

あれから3日 何故か仲間はずに なくなつた

1人になった私　行く場所なく　敵地をさ迷っていた

だが敵地の夜空は綺麗だ　3日も長く感じるような空だ

銃声が聞こえている　私は銃を持ち　荷物をまとめ　森へ走った

息を潜めつつ　右から聞こえる重機の音　敵軍の怒号

見つからないことを祈りつつ　右ポケットに入れてある日の丸を胸
に当てた

なんとか難を逃れ　ゆっくりゆっくり　森の中を進んだ

あと数日　ここから生きて帰れるか　自分でもわからない。

苦しむ日々（前書き）

今回も短めです・・・。

苦しむ日々

また銃声だ 私は体力の続く限り あたり一面緑色の森を駆けていた

見つかりそうな雰囲気 そんなときはいつもしゃがみ 息を殺す

それが何度も続き 私の体力も底をつきかけていた

まだ続くこの敵地 夜が明けるのを待つのも許さず 重機は迫ってくる

気づけば森の中腹を越えたあたり 捨てられた一軒家に飛び込んだ

ようやく休めるか 私は古ぼけた椅子に座り込み 一瞬眠りつきそ
うになった

思い出した 鞆の中から一枚の手紙を出して 宛先を読んだ

『 妻から 夫へ 』

ずっと読み忘れていた手紙 内容はどう言えばわからないが

いつも 読み返すたび 涙が止まらなくなる

妻はもうこの世に居ない 私が助け損ねたのだ

あの日 我が家は爆撃の業火に焼かれ あと少しのところで妻の手を掴めなかった

そんな自分が憎い 嫌いだが 妻の居る場所へ逝くのはまだ早い

また重機の音がする 敵だ すぐに荷物をまとめ 裏口から私は逃げた。

明日への日々（前書き）

また短めです・・・。

明日への日々

森から抜けきれそうな今　だが検問所や詰め所が多く見える

残る銃の弾は15発　敵の数は大軍だ　勝ち目がないと思う私は後ろを確認した

行けるかも知れない　そう考えたが　すぐに首を横に振り　しゃがみつつ様子を伺った

敵軍は私を探している様子はない　本当にいけるんじゃないか
いや　そんなはずはない

まだ日は昇らず　まわりは暗闇に包まれている　決意した私は前へ足を進めた

見つかつてはいけない　ほふく前進しつつ　敵が近づくたび　死を
覚悟した

ここを抜けねば　明日への道は消えてしまふ　そうだ　生き残るん
だ　再度決意を固めた

詰め所の真ん中あたりに来た　敵は食事中で　よくわからない言葉
で盛り上がっている

切り抜かれるか　物音ひとつなく　ゆっくり慎重に歩み進んだ

なんとか脱出できた　しかし油断は出来ない　詰め所の出口の先にも敵が見えた

またほく前進しつつ　息を殺し　疲れ果てそうな目先を必死に進んだ

崩壊しかけた市街地へと入ることに成功した　今どこなのかわからないまま

建物の廃墟を背に　私は日本国旗を胸に押し当て　空を仰ぎ　ゆっくりと座り込んだ。

街並み行く日々（前書き）

今回は私的に長めでややこしいかも・・・。

街並み行く日々

はっと目が覚めた　つい寝てしまった私　すぐに立ち上がるうとは
せず

耳を澄ませ　まわりに敵軍が居ないかをしっかりと確認した

前へ進む勇気が出ない　何故なら　射影物が少なく　その上狙撃地
点も多い

下手に行けば頭に一発頂戴することになる　だが進まねばならない

崩壊した街並みを観光する暇もなく　頭を下げ　足音なく　歩いて
いった

進むごとに増す恐怖感　そしてこの絶望感　私は敵地で生きてまだ
4日だ

仲間を失ってからまだ1日と思うと　長生きはしていない　脱出ル
ートなんてものはない

結局　こう思えば　私は死ぬしかないのか？　と違ってしまつが

失った妻　多くの友人　のためにも生きなければならない

気づくと 弾丸が私の右足の前に降ってきた

まずい 狙撃されている 私は全力で射影物の後ろに飛び込み 荒くなる息を静めた

手が震えている もう少しで仏様を拝むところだったろう

たった15発の弾丸で狙撃兵を倒せる見込みもない 逃げることを考えた

足音が聞こえる 右か 左か 賭けてみることもできずにいた

とにかく顔を出すのは自殺行為 また息を整え 私は廃墟の中を突っ切った

後ろから聞こえる銃声と叫び声 振り向く暇もない また逃げた。

逃げた日々（前書き）

今度も長め？ 微妙です・・・。

逃げた日々

逃げた先には 大量の墓地と 人骨や この町の人々とは違つ骨も

きつとこの町も私と同じ 空襲に遭い 同じ目にあつてしまつたんだらう

そんなことより 敵が追っていないか 確認してみる

敵は来ておらず 私は荷物を確認し 墓地の中を歩き始めた

これだけの人が犠牲になつたかはわからない だが敵軍が非道なことをしているのは確か

町の廃墟の中に広がる無縁墓地の数々 心が痛む

重機の響きが聞こえた　すぐ直感のまま　墓地の後ろに体を隠した

機動兵器が2・3機　私の隠れている墓地の前を通っていった

その後ろに数人の護衛兵　今にも撃ってきそうな形相で歩いている

少し足元で物音がしてしまった　すぐに私は気づき　必死に息と震えを止め続けた

敵は物音に気づいたが　私自身には気づかず　気のせいか・・・。
と言いつつ戻っていった

そのときだった　大爆発の轟音が鳴り響き　私の耳を破壊しかけた

交戦だ　どこどこかはわからない　後ろから爆音と銃声が鳴り止まない

私はその隙と　伏せながらも前へ前へ　安全圏まで行こうとした

しかし　敵軍だろうか　味方だろうか　わからないが　兵士たちがこちらへ向かってきた

『　隠れる　逃げるんだ　何も考えず突っ走れ　！　』

日本語でそう聞こえた　私は振り向かず　首を縦に振ることもなく前へ走っていった

ひたすら走ること数分　銃声が聞こえぬまで遠く　私は廃墟の物陰から様子を伺った

遠くからでも見えるほどの爆発　彼らは一体　何故私を助けたのか
わからず

考えることもなく　また彼らに救われるかも知れない

また私は歩き始め　街の奥地へと歩み進んだ。

襲撃の日々（前書き）

今回もまた微妙・・・かも。

襲撃の日々

市街地を行く中 私はあの無縁墓地にいた 恩人たちのことが気になっ
ていた

そんなことを言っても どうすることも出来ず

結局 ため息1つして 市街地を歩き続けた 崩落しかけている建
物が並ぶこの場所

一体 敵軍はどれだけのことをしたか 深く考える だが結論はい
つも 金のためだ

そんなことを言っていたら 物音が聞こえた 微かだが ちゃんと
した音を

⌞
! ! !
⌞

私の右腕を一発の弾丸が貫いた 痛みについ倒れかけたが

しっかりと足に力を入れ 立ち上がった どこからだ 必死に探した

良く見ると どこかでまた物音がし こちらに銃声が轟いた

今度は避けた なんとか凌ぎ切ろうと 私は血が流れる右腕を押さえつつ 建物内へ

（ このままだと 出血多量で死に至るか 腕が腐り落ちる ）

建物の中で私はそう考えた この傷は深い かなりだ

動かない右腕　前からは1人見える　銃は2丁　勝ち目はない

荒くなる息を抑え　勇気を振り絞って　私は銃を持った

空砲だが1発　敵は壁に隠れている

その隙で　壁から離れ　傷口を押さえている左腕に銃を持ち替え
敵に目掛け2発

命中したかわからないが　そのまま走りぬけ　屋外へ急いだ

絶望だった

外には重機が2機 まわりには大量の兵士が見えた

私は一瞬ながら意識が飛び そのまま眠るように倒れこんでしまった

ここで運命は果ててしまうのか そんなわけには いかない

奇跡は信じるために（前書き）

そろそろキャラ紹介しないとね・・・。

奇跡は信じるために

目が覚めた 死んだのか まさかそんなはずはない

あたりを見渡すと 救急箱と注射器 その横には拳銃もあつた

私は拳銃に手を伸ばしたが 何者かに手を掴まれ そのまま一言

「 中国人か？ それとも 日本人の生き残りか？

」

ハッとなった 彼らも日本人なのか そう思った私はすぐに私は
はい と答えた

すると彼は笑顔になり 銃を手渡してくれた

話によると 彼はある部隊の生存者で この場所 中国帝国軍に攻め入ったらしい

しかし 私を運ぶ道中 大量の帝国軍に襲われ 仲間は死に 今は彼1人となったそうだ

そんなこんなで 自己紹介となった

私は自己紹介をしようと思ったが 数年前に名を捨てており 事情があつて言えず

だが彼はそれでも名を答えてくれた 名はルーカス 傭兵経験もあるそうだ

2人でゆっくり話をしている暇はなく　ルーカスは早々と荷物をまとめ　私を起き上がらせた

場所は山地の近く市街地からは遠く離れた場所　ここなら敵は気づかない　と言っていたが

だが現実とは違った　遠くから2・3発の照明弾が見えたのだ

私とルーカスは急いで荷物を抱え　外へ逃げた

夜が近い　そう遠くにはいけなかった

「お前は 先に 行け！！」

ルーカスはそう言い 銃を片手に突っ走っていった

彼の決意は無駄にしまいと私は逆方向へ逃げ

その後 数回にわたる銃声に驚きつつ また走り始めた

山岳地帯を行き来するだけでかなりの体力を浪費する　すぐに私は
疲れ　倒れた

夜空が綺麗だ　　またあの日と同じような感じがする

もう　諦めたほうがいいのかも知らない　そう言い聞かせて　私は
眠りについた

運命だったのかも知れない（前書き）

学校で疲れてた私に感謝あれ

運命だったのかも知れない

私は倒れ 夜空を見つめていた 長い時間が経つたろうか

つい眠ってしまい 目が覚めると まだまわりは暗く

また眠りそうになる目をこすり 再度立ち上がって 行き旅すること

そんなことは思いつつも足が動かない ふと気づくとまだ前にも進んでいない

だがしかし 私は驚かされた そう 一発の銃声に

狙撃兵だろうか 私の右足スレスレを狙ってくる 移動手段潰す気だろうか

やられるわけにはいかない やる気を出し 岩の後ろまで走りこんだ

微かながら上のほうから装填の音がした その隙を見込んで私は逃げること

何故かわからなかった 次の一発がくるやと思いきや 撃ってこなかったのだ

ガサガサッと歩く音すらない 突如私の前に小柄な女の子が狙撃銃を向けていた

ああ 殺されるのか そう思ったが 女の子は銃口を空に向け 私に右手を差し出した

「何か・・・言おうとしているのか・・・？」

その言葉に 女の子は こくり と首を縦に振るだけだった

すぐに私は気づいた 彼女は喋れないということに

仕方なく 差し出された右手を掴み ゆっくりと立ち上がり 右手を握り 頭を撫でた

女の子は私の手に指で文字を書き 自己紹介を始めた

名は ルーカス・マイ まさかと思ったが あのとときのルーカスの娘だったのだ

そのことは静かに胸底に隠し 私はマイと一緒に旅 いや敵軍から逃げることになった

道のりは遠いが やれば出来るかもしれない その可能性に賭けた

彼女もそれを願っているのかも知れない 私の娘に似たこの手の暖

かさ 絶対に守ってみせる

襲来される日々（前書き）

連続ですし　すし・・・食べたいな・・・。

襲来される日々

マイと一緒に歩き続け 夜な夜なの山岳地帯を抜けつつあった

しかし 目の前から重機音が2・3機 私が気づく前に彼女が気づき 手を強く引っ張った

そそくさと逃げ 岩陰に隠れ 息を殺す私の隣で マイは銃身を動かしていた

ずどんっ　とはいかず　小さな音で1発　見事に重機がよろめき
崖の下へ転落していった

驚く私の横で　小さな女の子が狙撃銃を持って

あの戦闘重機を倒している姿　2度お目にかかれないうちと思
ったが

そんな思っている暇はなく　もう一発　戦闘重機がまた倒れ　崖底
へ落ちていった

マイは小さく手を私のほうへ向け　ハイタッチ　しかしすぐに敵軍
が来て　両手を銃にやった

ただ見ているだけの私と撃ち続ける彼女　なにかせねばと考えるが
動けぬまま

こちらに気づく暇もなく 来る敵軍はやられるまま 数分の間で山岳地帯が地獄絵図に

この狙撃銃は弾丸が切れることがないのか？ そう思ったが最後に
マイが銃を抱えた

「 マイ もういけるのか？
」

と言う私 彼女は こくり と縦に首を振り 早々と前へ前へと進んでいった

進むたび 足元にある死体が見える だが気にすることは無く

早々と私たちは山岳地帯を降りて行った・・・。

明日はあるか？（前書き）

遅れます

明日はあるか？

山岳地帯を降り 生い茂る森の中を駆け抜けた私とマイ

敵は少なく あっさりといけたような気がしたが

そうでもなく 私たちは中心部で行き詰まり 森の中に身を潜めていたのだ

（ …… 見えないが敵が2・3人？ いや…… もっと

だ・・・)

私は心内　そうつぶやいた　マイも同じ風に思っていたか　銃を構えた

しかし　弾丸がないのだ　結局私たちは何もせず　見つからないことを願い　隠れていた

隠れてから数分　マイが焦りながら　私の右手を掴んだ

何があったのかと気にはなった　そうだ　予想もしなかったことがあった

そのとき ほんのわずか数秒だったか 轟音が響き渡り 目の前の
森が一瞬で消えたのだ

微かに聞こえた敵兵の断末魔と銃声 空を見上げると 1機の人型
戦闘重機？が見えた

しかしあんなものを中国帝国が開発しているとは思えず また私は
悩んだ

マイはそんなことを知らず 私の手をひっぱり 森の奥地へと歩み
行った

森の中に一軒の小屋があり 私たちはそこに避難していた

そこには大量の弾丸 食料もあつた

とりあえず弾丸を拝借し 途中休憩しながら

どうやってあの人型兵器から逃れれるか考えた

私はすぐに気づいた マイが震えていることに 何故だかわからなかったが

彼女が写真を見つめ 涙を流していた その写真には あの兵器と同じものが写っていた

「まさか・・・君はあの兵器のこと・・・」

だが私は言い詰まった　彼女が目も見えぬはずだが　写真を触れて泣いている姿を見て

事はそう待つてはくれなかった　また轟音が響き　この小屋の前に何かが降り立った

扉が開き　1人の男が現れ　私たちにこう言った

「マイ 旧日本軍陸兵さん 迎えに来ましたよ・・・

」

ハッ となつた私を連れ 名も名乗らぬ彼は機体に乗せ どこかわからない場所へと・・・。

明日はあるか？（後書き）

突然の新規参戦・・・！

架け橋　そして・・・。（前書き）

突然の来訪者・・・　まさかの急展開・・・！

架け橋　そして・・・。

飛ぶこと数分　ちょうど日本海上空あたりだろうか　人型戦闘兵器に乗るとは思わなかった

ようやく着いたか　着地した感じがあった

操縦者である男がヘルメットをはずし　こちらへ振り向き　一言

「　挨拶忘れてましたね　俺はアキって言います　あなた
は？」

私は偽名を名乗った 高原 と言う偽名を その名前を聞いてか

アキさんは再度前を向き そろそろ到着です と言いながらも
急速回転

私たちは降りて行った先にある町を見て絶望した そこにあったのは

砂漠地帯 と 広がる廃墟の山 ここが日本だというのだから驚き
だった

私が日本を離れてたった1週間 中国帝国の仕業かと聞いたが 違うとのこと

そして彼 アキさんは日本軍の生存者を探していて 最後の2人が 私たちだと言う

また轟音が鳴り響いたかと思いきや トラックが1台 運転手がこちらに手招きをしている

あれに乗るといい アキさんは言いながら 再度人型機体に取り込み 天へと昇っていった

私たちはトラックに乗り込んだ 運転手だけ居て 他には誰もおらず

運転手の話によると 今生き残っているのは あのアキさんと私たちだけ だそうです

「バカな……ッ！ ありえない…… たった1週間
で……！」

私はつい口走った 運転手の顔色が変わり私に叫んだ これが現実
だと

前を見ると 死体？人骨？ が道路中 砂漠中に転がり 中には未
だ苦しみ続けている人も居ると言う

近くに町が見えてきた　だからこんなに死体や骨が転がっているの
かと考えた

単純な話だった　町の中は大量の人々かと思っただ　そうでもなく

大量の死骸 と 死にかけている動物の群れ そんなものばかりが
広がっていた

運転手は片手で帽子を取り 小さくなにかをつぶやき ブレーキを
かけて 降りていった

それに私たちもついていき ある建物へ入っていった

「 ここが お前たちの避難場所だ 死体は気にするな 自
殺したバカどもだ・・・」

マイは悪臭でふらつきながら 私の右腕を掴み 小さく嗚咽をしつ

つ座り込んだ

さすがに私も反論せねばと思ったが 運転手の左腕には銃があり

何も言えず 結局そこで過ごすことになった・・・。

架け橋　そして・・・。
(後書き)

まさかの日本・・・！
次回は大襲撃です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6016y/>

ある日のこと

2011年12月5日15時02分発行